

がん患者としての体験から

城ヶ端初子¹⁾

Hatsuko Jogahana

はじめに

私はこの40年余り臨床の看護師として高齢者やがん患者の看護を行ない、看護大学・短期大学の教員として看護の理念や看護技術およびがん看護等を教えてきました。その私が、4年前、突然に大腸がんと診断され、入院・手術を受け、抗がん剤を服用する立場に立たされることになったのです。それまでは大きな病気をすることもなく、いつも看護する者として、あるいは看護を教える者としての立場で、患者や学生にかかわってきたのでした。しかし、患者として看護を受けてみると、医療や看護の現状がはっきりと見えてきました。そこには思いもよらない出来事が多くありました。このたびは、私の入院生活・手術・退院そして抗がん剤の副作用による脳症で再入院した体験と私の受けた医療・看護に関する思いを述べたいと思います。

1. がんとの遭遇

暮れの押しつまった頃、胃カメラと大腸ファイバーを受けることになりました。大腸ファイバーを受けている時、画面に突然どす黒い色の大腸壁があらわれたのです。「うわあ！やられた！」と私は叫んでいました。まぎれもない大腸がんそのものが見えていたからです。青天の霹靂でした。年末・正月の重苦しい私の気持ちとは裏腹に1月に入院・検査・手術のスケジュールが決まってきました。この入院生活で、多くのことを感じ、医療者に対する思いも複雑なものがありました。その頃の私の状況は次のようなものでした。

- (1) 大腸ファイバーの検査室で、施行者である医師達が私に関する話題でもりあがっている場面に直面しました。彼らは、私とその本人であることに気づいてはいなかったのです。
- (2) 手術前日、主治医・看護師から手術および手術前

後の生活に関する説明を受けました。主治医からは人工肛門の覚悟はしておいてほしいと説明され、夫からは、生命を救うためになることであれば、人工肛門でもなんでもするから了解して欲しいと言われておりました。何もかも他者に任せて手術を受けることになったのです。

- (3) 手術当日、覚悟を決めて手術室に向かいました。青空と病院中庭の木々に陽光が降りそそぐ風景を心に焼きつけて。この風景は2度と見ることはないかも知れないと思ったものです。
- (4) 手術後、夫は主治医から切除された大腸を示され、がんが広範囲であったこと、少量ではあるが腹水が溜まっていたこと、人工肛門は免れたものの、余命半年であるという宣告を受けたそうです。しかし、主治医は私には悪いところは全部とれたので心配ないと言われました。
- (5) 私は医師の態度、看護師の私を避ける姿勢、夫の無理をしているらしい態度などから事態の状況を察知したのです。医師も看護師も誰も余命半年には触れず、オブラートに包んだ助言をするばかりだったのです。その中に、唯一人輝いている看護師がいました。がんの術後にもきちんとした対応をし、ケアも間違いのない看護の達人でした。私はこの看護師にどれ程支えられたか知れません。この看護師からがんに立ち向かう勇気のきっかけを与えて頂きました。今でも感謝しています。「本当のこと知りたので教えて欲しい」、「何を言われても受け止められるから」「私の人生だからやりたいことをやり終えたいから」と夫に迫り真実を聞き妙に落ち着きました。
- (6) 退院、外来通院、そして抗がん剤の服用が始まりました。薬局で薬剤を受け取る時、薬剤師が「これは抗がん剤です。きちんと飲んで下さい」と説明するのです。まわりの人々の視線がいっせいに私に注

¹⁾ 大阪市立大学医学部看護学科 Osaka City University School of Nursing

がれました。薬剤師は何故、人前で無神経にこのようなことを言うのでしょうか？私は他の知らない人に自分ががんであることを知ってほしくはないので、時に他の薬剤の服用を忘れることはあっても、抗がん剤は決して忘れず指示通りに正確に飲み続けました。これが後に大きな問題になることも知らずに。

2. 桜の木の下で

4ヶ月ぶりに職場に復帰した頃、看護学科棟の前庭の桜が花をつけ、新入生の声がキャンパスにこだまして、春爛漫を絵に描いたような状況でした。新しいものの始まりです。いつの間にか新芽が萌え出ずる、そんな生命が躍動する季節に変わっていたのです。既に新入生の講義が始まっていました。そんなある日、青空に桜が映えて美しいと見上げた瞬間、大きく天地が揺れて転倒してしまいました。そこを通りかかった看護教員の「先生、学生が見ていますから起きて下さい！見られると恥ずかしいですから」という声が遠くに聞こえました。その教員は私に手を貸すわけでもなく、そのまま事務に連絡し去っていきました。私が冗談をしているとでも思ったのでしょうか？私は独力では起き上がれない脱力感で、全身汗びっしょりだったのです。事務の方に車椅子で研究室に送っていただきました。これが抗がん剤による副作用の始まりでした。

3. 脳症との闘いの中で

身の置き場のない強い倦怠感と心理面の落ち込みで不安な日々を送ることになりました。ある日、仕事から自宅にたどり着いた直後、意識を失い長い暗闇の世界に落ちていきました。その後は意識不明となりました。異常な言動が続き、あわてた夫によって外来受診を経て他の私立の病院に入院しました。

(1) 意識が戻った時、外は梅雨の雨が降り続いていました。主治医からはレントゲン写真でも脳の白質、灰白質ともにひどい損傷でほとんど脳挫傷のような状態であり、特に治療法はない。後は患者本人の生命力にかかっているという説明を受けたそうです。実際、治療法は抗がん剤の服用を中止しただけでした。後になって主治医からビタミン大量療法を試みたということも聞きました。

(2) 病室の中で、そこはどこなのか？自分は誰なのか？何故自分がそこにいるのか？自分に声かけする

白衣の人は誰なのか？全くわかりませんでした。その上にベッドから動けない日々、食事も排泄も全面介助を受けていました。「食事はさっさと食べて」とか「オムツは自分でとらないで」と注意される毎日で苦しいものだったのです。ようやくリハビリを受け歩けるようになると監視つきの病棟に転室となりました。冷房完備、トイレ、テレビ、電話などのついた個室で快適そのものの雰囲気でしたが窓には鍵がかかっており、病室の入口を一步出ると看護師が走りよって私を病室に帰すのでした。自由のない入院生活の始まりだったのです。それでも見舞客は私に言うのです。「外は暑いのに涼しくてこんなにきれいな部屋に入院できてあなたは幸せやと思いなさい」と。確かに設備はいいのですが、危険なものは一斉いけないと筆記用具や鏡の持ち込みも許されず、規制された生活が幸せというのでしょうか？私はそんな人達には話すことをやめました。

(3) 立つ練習、伝い歩きの訓練からリハビリテーションを続け、ようやく自力で歩行できるようになると、脳の訓練も始まりました。その訓練のある日、私はお腹をこわしていました。訓練中に急ぎトイレに向かいました。その後、3人の担当者（医師・看護師・指導員）が私を大探した様子。私の入っているトイレの前で「中に入っているのは誰や？」とたずね、私であることが分かったと「流さずそのまま出てきなさい」と指示するのです。私がトイレを出ると1人は「逃げたのかと思った」2人目は「本当にトイレに行きたかったんやネ」そして、3人目は「単独行為はやめなさい」と言ったのです。このように私の生活は監視され規制づくめの日々だったのです。

(4) 少しずつではありますが着実に回復していった頃、脱毛が始まりました。ある朝、目覚めると枕が髪の毛で真っ黒になっていたのです。どんどん髪が抜けていきました。看護師に訴えても何のケアもなく「暑いから涼しくていいやないの」の発言。私はつらかったのです。夜になると窓ガラスに自分を映して泣きました。鏡は危険であるからと病室には置けなかったからです。また、入浴日は洗い場に患者を並べて一律に介助する方法、厳しい規制の入院生活が続きました。「患者」は英語で「Patient」といいます。このPatientには「耐える人」という意味があります。この時の私はまさにPatientでした。

(5) お盆が近づいた頃、私にはもう一つやり残したことがあることに気づきました。それはお盆の帰省で

郷里の人々とのお別れと墓前に参ることでした。しかし、それは許されませんでした。

4. がんとともに生きる

ようやく退院できたのは余命半年といわれた期限の8月末でした。それでも私は生きている！それを実感しました。しかし、退院ができて日常生活に適応するまでには相当の時間が必要でした。やがて自宅療法を続けながらかねてから念願であった「源氏物語」の学習を始められるようになったのです。「宇治十帖」ゆかりの史跡をめぐる散策や自然に親しむ毎日でした。いつまた発病するかもしれないがん向き合って静かに生きていく、そんな心境でした。

がんという病気を体験したことを今、私はこんな風に思っています。病気はマイナスだけではないということです。病気や苦難の中にあって生きている意味を見出し、それに立ち向かっていく勇気を与えられるということ

す。おそらく病気をしなければ、病む者の心をこれ程に深く知ることはなかったことでしょう。我が身に起きたこと、その過程で出会った人々、そして家族に感謝しています。

おわりに

入院中、私の受けた看護は一般的なもので特に悪いということではありません。しかし、その一般的であることがこのような有様なのです。そこに大きな問題があると思います。医療は患者を中心に展開される活動であるはずで、がん患者の置かれている現状をお汲み頂き、これからのがん治療の発展と看護師のがん看護に対する熱い思いと活動を期待したいと思います。最後に患者の心の叫びとして「きいてください看護師さん (Listen Nurse)」を提示して終わりに代えさせていただきます。

尚、その時の筆者の気持を詩に加えさせていただきました。

Listen, nurse きいてください、看護師さん

I was hungry and could not feed myself.
You left my food tray out of reach on my bedside table.
Then you discussed my nutritional needs during a nursing conference.

I was thirsty and helpless, but you forgot to ask the attendant to refill my water pitcher.

You later charted that I refused fluids.

I was lonely and afraid,
but you left me alone
because I was so cooperative
and never asked for anything.

I was in financial and in your mind I became an object of annoyance.

I was nursing problem and you
discussed the theoretical basis of my illness.

And you do not even see me.

ひもじくても、わたしは、自分で食事ができません。
あなたは、手のとどこぬ床頭台の上に、私のお盆を置いたまま、去りました。
そのうえ、看護のカンファレンスで、わたしの栄養不足を、議論したのです。

のどがからからで、困っていました。でも、あなたは忘れていました。付添さんに頼んで、水差しをみたくしておくことを。
あとで、あなたは記録につけました。私が流動物を拒んでいます、と。

わたしは、さびしくて、こわいのです。でも、あなたは、わたしをひとりぼっちにして、去りました。わたしが、とても協力的で、まったくなにも尋ねないものだから。

わたしは、お金に困っていました。あなたの心のなかで、わたしは、やっかいものになりました。

わたしは、1件の看護的問題だったのです。あなたが議論したのは、わたしの病気の理論的根拠です。

そして、わたしをみようとかえなさらずに。

I was thought to be dying and, thinking I could not hear, you said you hoped I would not die before it was time to finish your day because you had an appointment at the beauty parlor before your evening date.

You seem so well aducated, well spoken, and so very neat in your spotless unwrinkled uniform.
But when I speak you seem to listen but do not hear me.

Help me dare about what happens to me, I am so tired, so lonely and so very afraid.

Talk to me-reach out to me-take my hand.
Let what happens to me matter to you.

Please, nurse, listen.

RUTH JOHNSTON. R.N. New Orleans, La.
(from American Journal of Nursing)

わたしは、死にそうだと思われていました。私の耳が聞こえないと思って、あなたはしゃべりました。今晚のデートの前に美容院を予約したので、勤務のあいだに、死んでほしくはない、と。

あなたは、教育があり、りっぱに話し、純白のぴんとした白衣をまとして、ほんとうにきちんとしています。
私が話すと、聞いてくださるようですが、耳を傾けてはいないのです。

助けてください。わたしにおきていることを。心配してください。わたしは、疲れきって、さびしくて、ほんとうにこわいのです。

話しかけてください。手をさしのべて、わたしの手をとってください。
わたしにおきていることを、あなたも、大事な問題にしてください。

どうか、きいてください。看護師さん。

American Journal of Nursing,
(1971年2月号より)

※筆者の気持を加えたものです。

私は自分では何もできずにベッドに横たわっていました。
あなたは「食事はさっさと食べなさい」「おむつは勝手にとらないで」と言ったのです。
私もそうしたかったのです。
でも悲しいことにそれができなかったのです。

抗がん剤で私の髪は抜けていきました。
あなたは言いました「涼しくていいんじゃないの」とでも私は不安でこわかったのです。
髪がなくなったら女ではなくなるような気がして。

リハビリで私が居なくなったとあなたは大探しました。
トイレにいる私を見つけてあなたは言いました。
「逃げたのかと思ったわ!」と
私はただトイレに行きたかっただけなのです。
もっと患者の思いをわかってほしいのです。

ようやく動けるようになるとあなたは私を監視つきの病棟に移しました
冷房、トイレ、電話つきの美しい個室でした。
でも、私が何をするか分からないからと窓には鍵がかかっていました、
監視され自由のない生活は苦しいものなのです。